

はじめりは江戸時代

田原祭りは、城下町・田原を代表する祭。もともとは八幡社・神明社・巴江神社の氏子の祭りで、八幡社は新町、神明社は本町・萱町・衣笠、巴江神社は巴江がそれぞれお祀りしています。昼間はからくり人形を乗せた3台の山車(だし)や各町の神輿が街中を練り歩き、夜は着飾った子どもたちや青年が夜山車(よやま)の上で手踊りを披露します。祭りのフィナーレを迎える最終日の夕方になると、はなのき広場で手筒・大筒花火が勇壮にあげられ、午後8時からクライマックスを飾る打ち上げ花火が夜空を焦がします。

田原祭りのルーツをたどれば、江戸時代。熊野神社の祭礼として始まったと伝えられています。明治時代以降、名古屋型山車が田原に登場し、いつしか精巧なからくり人形が人々を魅了するようになりました。現在では、八幡社・神明社・巴江神社の祭をあわせて、田原祭りと呼ぶようになりました。

観衆を魅了するからくり人形

祭りの主役となる豪華な屋台仕立ての昼山車(ひるやま)は、新町・本町・萱町が1台ずつ保有しています。田原の山車は、宝暦7年(1757)8月に当時の本町上り町・横町・中町が申し合わせ、合同で田原藩の浅黄無紋(あさぎむもん)の横幕・天幕を借用し、車を仕立てたことが始まりといわれています。また、山車からくりは二層唐破風屋形四輪の名古屋型と呼ばれるもの。中世に熱田と津島の天王祭りに出された「大山」がそのルーツだといわれています。その昔、神々の依代とされた山車からくり。踊りながら変わり身する人形の様子に、人々は神々の降臨する姿をかいま見たのではないのでしょうか。

明治29年(1896)に新調された本町の山車は、名古屋の一流職人を総動員して造り上げたもので、山車造りの名人と言われたお祭り棟九郎(森籐九郎)が山車を造り、からくり人形は六代目・玉屋庄兵衛の作。祭の際には昼間市内を曳行され、上段に飾られた三体のからくり人形が絶妙な動きで観客を魅了。下段では若衆が横笛、鼓、太鼓などお囃子を奏でます。

山車の先頭に立ち厄を払う総代人形、囃子にあわせて鮎を釣り上げる神功皇后人形、動きが巧妙で鮮やかなしぐさの唐子人形。これらのからくり人形は、昭和63年(1988)3台の山車とともに、田原市の有形民俗文化財の指定を受けています。普段はそのうち2台が、田原まつり会館に展示されていて、いつでも見学することができます。